いる。Ｐ６・７は主柱穴に比べてやや規模は小さいが、位置的な関係から、棟持柱のような構造柱の柱穴である可能性がある。また、Ｐ５の底面で、Ｐ５以前に掘り込まれたＰ10を検出した。

また、本遺構の北側には、溝を伴うＰ11・12も検出しており、Ｐ８・９・11・12の存在とあわせSI４以前に段状の遺構があった可能性がある。

埋土は６層に分層できた。下層（３～６層）は地山ロームを含む層であるが、上層（１・２層）は黒褐色土系の腐食層と考えられ、廃絶後自然堆積したものと考える。第５・６層の下面で、炭層を検出した。この炭層は、平面的には広がりを持たないもので、床面上に形成されたものである。第７層は地山と考えられる。

遺物には、埋土中から壺31～35、短頸壺36、甕37～50、土製紡錘車51～56、土玉57、流紋岩質凝灰岩製砥石Ｓ20、無斑晶安山岩製石鏃Ｓ22・23、黒曜石製石鏃Ｓ25、無斑晶安山岩製の石錐の可能性があるＳ24、使用痕のある黒曜石剥片Ｓ26、刀子片Ｆ１が出土した。また、床面上で緑色凝灰岩製管玉Ｓ21が出土した。

出土遺物から、SI４の時期は清水編年Ⅳ－２・３様式、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。

SI５（第43・44図、表５、PL.19・51・82、巻頭図版２）

４区北西側のＢ19グリッドにあり、標高49.7m付近の下部平坦面に立地する竪穴住居跡である。弥生時代中期の遺物を包含するクロボク層（４－Ⅳ層）を除去した後の、ソフトローム層上面で検出した。竪穴の掘り込みを確認することはできなかったが、壁溝の一部と主柱穴を検出した。掘り込み面は認識できなかったが、遺構検出作業中に遺物が出土していることから、本来はクロボク層中から掘り込まれたものと考えられる。

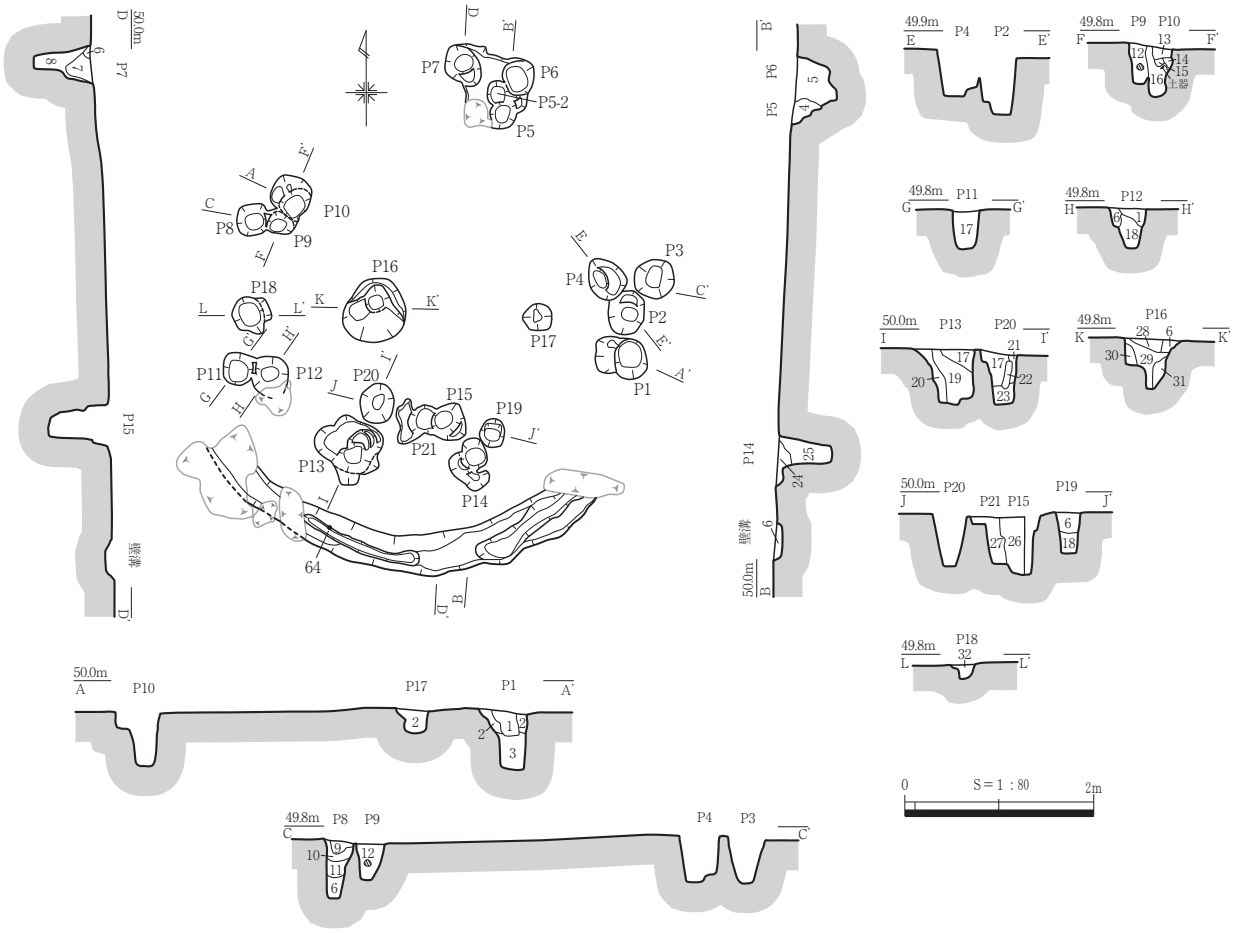
平面は円形を呈すものと考えられ、長軸5.4m以上、短軸5.2m以上を測る。深さは不明である。床面積は、19.8㎡以上である。幅23～40cm、深さ５～10cmを測る弧状を呈す壁溝を部分的に検出した。全周していたものか不明である。

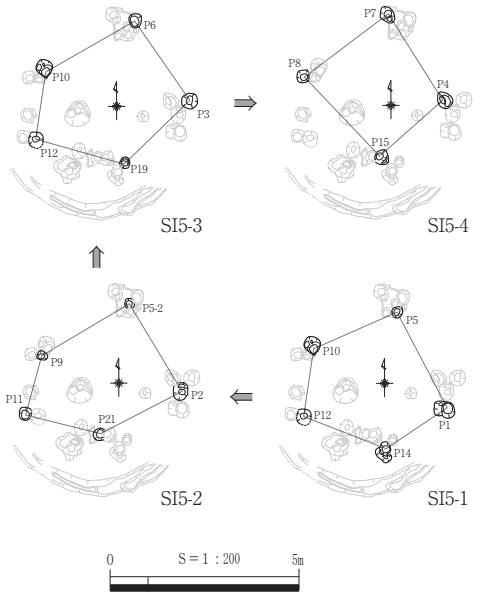
主柱穴に該当すると考えられるものは、Ｐ１～12、Ｐ14・15、Ｐ19・21の16基で、４本から５本の主柱穴となるものが３回程度建て替えられたものと考える。ピットの深さは、50cm以下のもの、50～70cm程度のものに分けることができる。また、これらのピットの中には切り合い関係が判明したものがあり、Ｐ５→Ｐ６、Ｐ９→Ｐ８、Ｐ９→Ｐ10、Ｐ21→Ｐ15の順にそれぞれ掘り直されていた。

表５　ＳＩ５ピット一覧表

ピット番号	規模（長軸×短軸－深さ）cm	備考	ピット番号	規模（長軸×短軸－深さ）cm	備考
Ｐ１	43×34－67	SI5-1主柱穴	Ｐ11	34×31－51	SI5-1・-2主柱穴
Ｐ２	46×38－67	SI5-2主柱穴	Ｐ12	35×33－51	SI5-3主柱穴
Ｐ３	44×41－45	SI5-3主柱穴	Ｐ13	57×56－46	
Ｐ４	46×37－50	SI5-4主柱穴	Ｐ14	33×24－58	
Ｐ５	32×27－52	SI5-1主柱穴	Ｐ15	37×35－65	SI5-4主柱穴
Ｐ５-２	25×23－47	SI5-2主柱穴	Ｐ16	69×63－57	中央ピットか
Ｐ６	40×33－40	SI5-3主柱穴	Ｐ17	42×32－27	
Ｐ７	48×36－60	SI5-4主柱穴	Ｐ18	31×28－17	
Ｐ８	34×33－62	SI5-4主柱穴	Ｐ19	30×24－42	SI5-1・-3主柱穴
Ｐ９	28×23－40	SI5-1・-2主柱穴	Ｐ20	42×36－53	
Ｐ10	42×40－53	SI5-3主柱穴	Ｐ21	30×24－49	SI5-2主柱穴

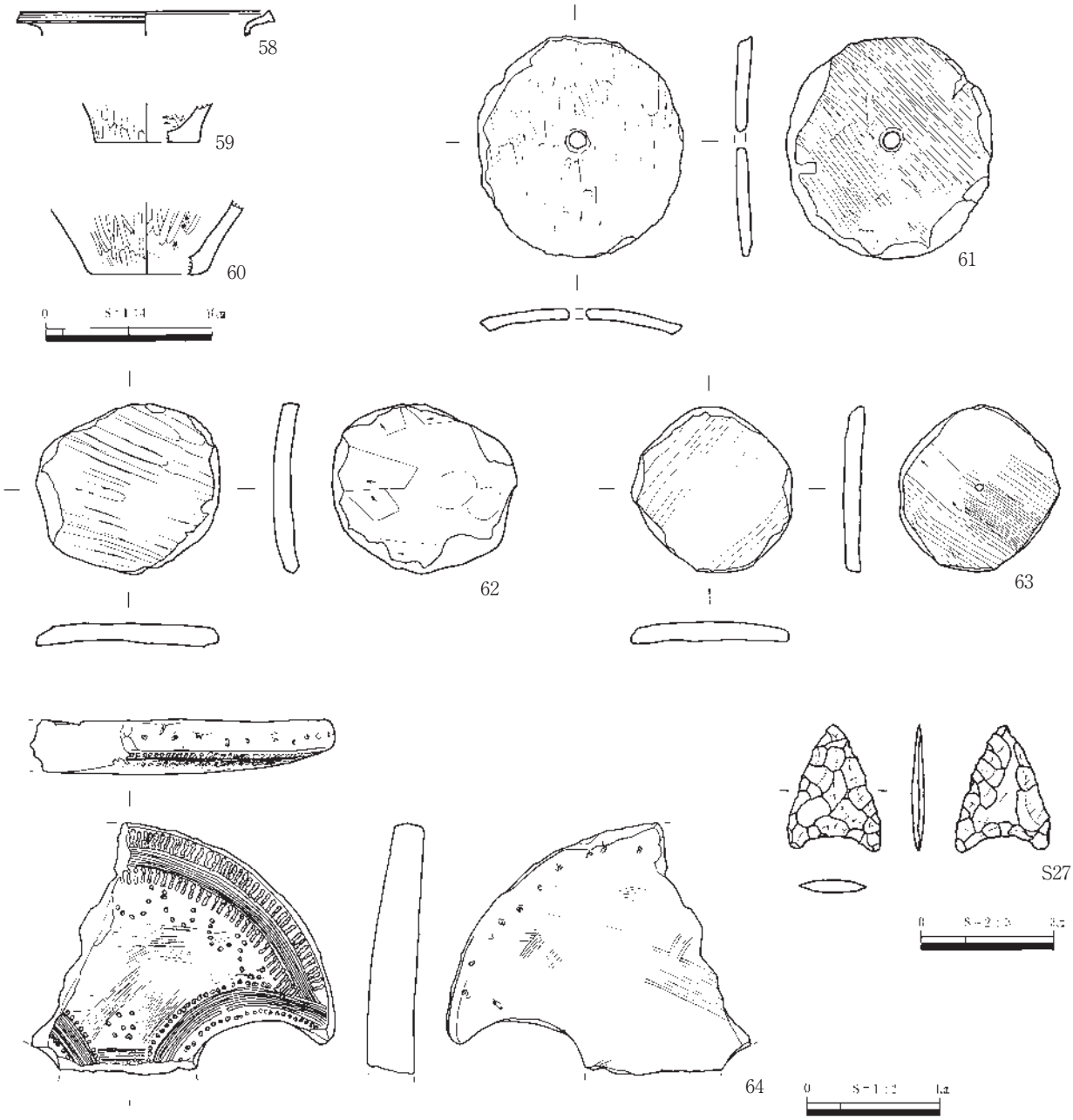
復元される主柱穴の組み合わせは、Ｐ１・５・10・12・14(SI５－１)、Ｐ２・５－２・９・11・21(SI５－２)、Ｐ３・６・10・12・19(SI５－３)、Ｐ４・７・８・15(SI５－４)が想定でき、柱穴の切り合い関係からみると、SI５－４が最も新しくなる可能性があり、最終的に規模が縮小した住居跡と考えることができる。





1　黒色土(7.5YR1.7/1)
2　黒褐色土(7.5YR3/1)　地山粒を多く含む。地山ブロックを若干含む
3　黒褐色土(10YR2/3)　地山粒を多く含む
4　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒･粒子を多量に含む
5　黒色土(7.5YR1.7/1)　地山粒を多く含む。地山ブロックを少し含む。炭化物を若干含む
6　黒褐色土(7.5YR2/2)
7　黒色土(7.5YR1.7/1)　地山粒を少し含む
8　黒色土(7.5YR1.7/1)　地山粒･粒子･ブロックを多量に含む
9　黒色土(7.5YR1.7/1)　地山粒･ブロックを少し含む
10　黒褐色土(7.5YR3/1)　地山粒を多く含む
11　黒色土(7.5YR2/1)　地山粒を多く含む
12　黒褐色土(7.5YR2/2)　地山粒･ブロックを少し含む
13　黒褐色土(7.5YR2/2)　地山粒･粒子を多く含む
14　暗褐色土(7.5YR3/3)
15　黒褐色土(7.5YR2/2)　地山粒を少し含む。地山粒子を多く含む
16　黒褐色土(7.5YR2/2)　地山粒子をかなり多く含む。地山粒･ブロックを少し含む
17　黒褐色土(7.5YR2/2)　地山粒を多く含む。地山ブロックを少し含む
18　黒褐色土(7.5YR2/2)　地山ブロックを少し含む
19　黒色土(7.5YR2/1)　地山粒･ブロックを少し含む
20　黒褐色土(7.5YR2/2)　地山粒･ブロックを多く含む
21　黒褐色土(7.5YR2/3)　地山粒を少し含む
22　黒褐色土(10YR2/2)　地山ブロックを少し含む
23　暗褐色土(10YR3/3)
24　黒褐色土(10YR3/1)　φ2～10㎜の地山ブロックを少し含む
25　黒褐色土(10YR2/2)　地山粒･ブロックを多く含む
26　黒色土(7.5YR1.7/1)　地山粒･粒子を少し含む。地山ブロックを若干含む
27　黒色土(7.5YR1.7/1)　地山粒･粒子を多く含む。地山ブロックを少し含む
28　極暗褐色土(7.5YR2/3)　地山粒子を少し含む
29　暗褐色土(10YR3/3)　地山粒を少し含む
30　黒褐色土(10YR2/3)
31　極暗褐色土(7.5YR2/3)　地山ブロックを多く含む
32　黒褐色土(10YR2/2)

第43図　SI５



第44図　SI5出土遺物

主柱穴間距離は、SI５－１はＰ１－Ｐ５間から順に2.9m、2.4m、1.8m、2.3m、2.0m、SI5-2はＰ２－Ｐ５－２間から順に2.7m、2.7m、1.7m、2.0m、2.4m、SI５－３はＰ３－Ｐ６間から順に2.5m、2.7m、1.8m、2.4m、2.4m、SI５－４はＰ４－Ｐ７間から順に2.7m、2.8m、2.9m、2.2mである。

主柱穴以外に、Ｐ15～18が検出されたが用途は不明である。

主柱穴に囲まれた内部に、主柱穴に比べて規模が大きいＰ16があり、中央ピットの可能性がある。

埋土は、壁溝内で確認した黒褐色土である。

遺物は、南側壁溝埋土中から土製紡錘車61、土製紡錘車未成品62、Ｐ15内から無斑晶安山岩製石鏃Ｓ27が出土した。また、埋土中から甕58～60、土製紡錘車未成品63、南側壁溝上層で分銅形土製品64が出土した。

出土遺物から、SI５の時期は清水編年Ⅳ－１様式、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。

SI６（第45・46図、表６、PL19・51）

４区中央のＤ18グリッドにあり、標高50.4m付近の下部平坦面に立地する竪穴住居跡である。弥生時代中期の遺物を包含するクロボク層（４－Ⅳ層）を除去した後の、ソフトローム層上面で検出した。わずかに掘り込みを確認したが、SI５同様、本来はクロボク層中から掘り込まれたものと考えられる。東側約１ｍにはSK30・33が隣接している。住居西側埋土をSX４が掘り込んでいる。なお、中央部分には、平成21年度確認調査によるトレンチが掘り込まれている。確認調査では遺構の存在は確認できなかった。

平面形は円形を呈すものと考えられ、長軸5.0m以上、短軸4.4m以上を測る。深さは、最も遺存状態のよい西壁で最大８cmである。床面積は、推定18.1㎡である。西側壁際で幅16～22cm、深さ２～６cmを測る壁溝を部分的に検出した。全周していたものか不明である。

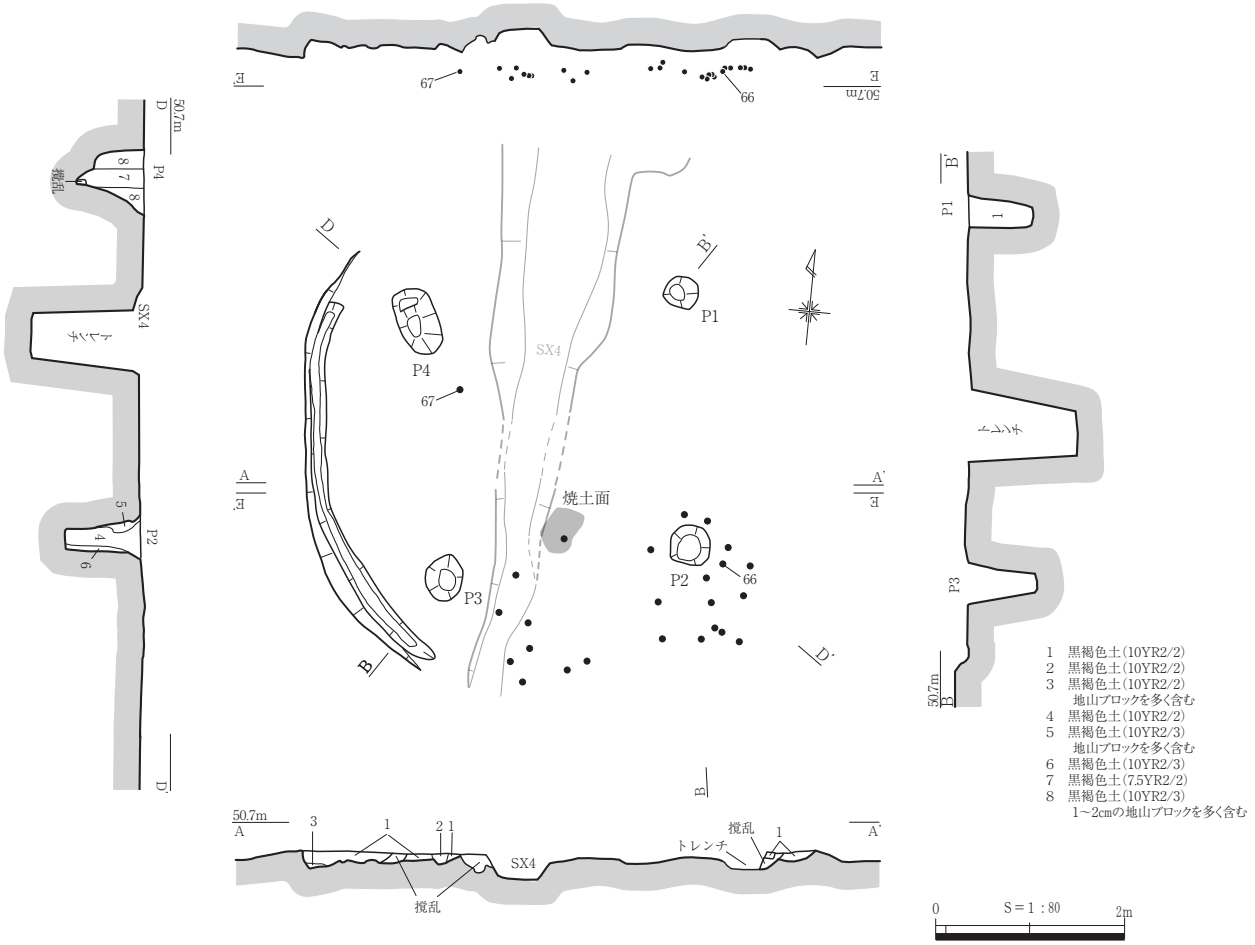
主柱穴はＰ１～Ｐ４の４基で、主柱穴間距離は、Ｐ１－Ｐ２間から順に2.7m、2.6m、2.7m、2.8mである。Ｐ２・Ｐ４で柱痕が検出されたが、復元される柱径はそれぞれ20cm、25cmである。

また、床面中央やや南寄りで、焼土面が盛り上がるように検出された。

埋土は、黒褐色土系の２層に分層できた。

遺物は、床面直上で弥生土器壺66が出土した。また、埋土中から弥生土器壺65、甕67～71が出土した。

床面出土遺物から、ＳＩ６の時期は清水編年Ⅳ－１様式、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。



第45図　SI６

SI７（第47図、表７、PL.20）

１区南西寄りのＦ５グリッドにあり、標高58.5m付近の上部平坦面に位置する竪穴住居跡である。約５～６m北側にＳＩ１がある。梨畑として土地利用された際に削平されており、表土除去後のホーキ層で検出した。暗渠や施肥溝などによって大きく攪乱を受けていたため、壁は残存せず、わずかに残った壁溝と柱穴配置などによって､辛うじて竪穴建物跡と認識できた。

平面は円形を呈すると推定する。住居跡の南側において、内側と外側の２条の壁溝を部分的に検出した。住居跡の規模は、外側の壁溝から径約6.4m、床面積32.2㎡に、内側の壁溝から径約5.1m、床面積約21.2㎡に復元できるが、深さは不明である。

内側の壁溝の幅14cm、外側の幅16cmで、いずれも深さ６cmを測る。

主柱穴に該当すると考えられるのは、Ｐ１～Ｐ８の８本で、４本の主柱穴が２回建て替えられたものと考えられる。柱穴はいずれも表面が削平されるほか、Ｐ１～Ｐ３・Ｐ７・Ｐ10は、暗渠や施肥溝などによって一部が壊されているため、現状での規模となるが、Ｐ１～Ｐ４が径40～50cm程度、深さ70～80cm程度で、Ｐ５～Ｐ８が径20～30cm程度、深さ25～50cm程度となる。

このことから、主柱穴の組み合わせは、内側のＰ５～Ｐ８（ＳＩ７－１）と、外側のＰ１～Ｐ４（ＳＩ７－２）とに復元できる。そして、ＳＩ７－２は外側の壁溝と、ＳＩ７－１は内側の壁溝と組み合うものと考えられ、先後関係はＳＩ７－１→ＳＩ７－２の順と推定できる。また、ＳＩ７－１の主軸は、ＳＩ７－２と比べて、９°～14°程度西側にふれている

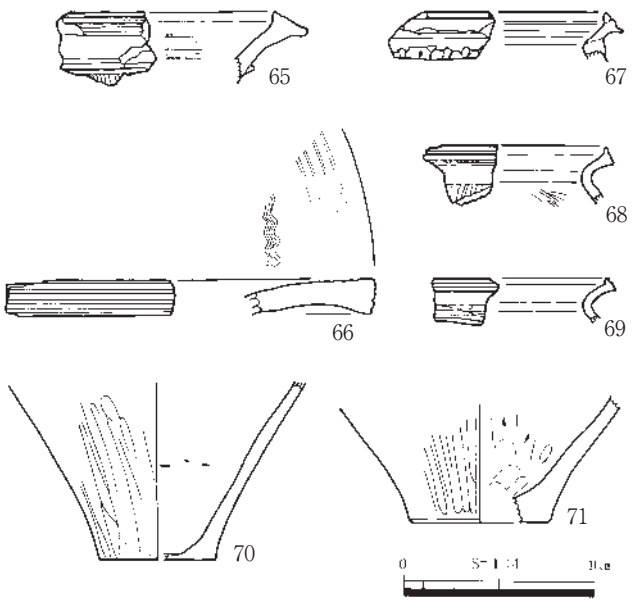
主柱穴間距離は、ＳＩ７－２はＰ１－Ｐ２間から時計回りの順に、2.8m、2.7m、2.8m、2.8mとほぼ正方形に並び、ＳＩ７－１はＰ５－Ｐ６間から時計回りの順に、2.0m、1.9m、2.1m、2.1mと不整方形に並ぶ。

主柱穴のほかにＰ９～Ｐ11を検出したが、Ｐ９とＰ10はそれぞれＰ５－Ｐ６間とＰ７－Ｐ８間のほぼ中間の線上にあり、径20～40cm、深さ40～50cm程度と、Ｐ５～Ｐ８の規模と近いが､配置からみてＳＩ７－２の棟持柱と考えた。

柱穴Ｐ１～Ｐ４の埋土は、黒褐色土を主体と

表６　ＳＩ６ピット一覧表

ピット番号	規模（長軸×短軸－深さ）cm	備考
Ｐ１	35×32－69	主柱穴
Ｐ２	42×41－75	主柱穴、柱痕(径20cm)
Ｐ３	50×38－75	主柱穴、
Ｐ４	72×42－74	主柱穴、柱痕(径25cm)



第46図　SI6出土遺物

表７　ＳＩ７ピット一覧表

ピット番号	規模（長軸×短軸－深さ）cm	備考
Ｐ１	51×47－77	
Ｐ２	54×43－73	柱痕跡有（径30cm）
Ｐ３	37×32－69	
Ｐ４	54×43－72	柱痕跡有（径22cm）
Ｐ５	36×28－48	
Ｐ６	43×39－27	
Ｐ７	34×30－51	
Ｐ８	30×28－40	
Ｐ９	34×25－51	
Ｐ10	53×38－51	
Ｐ11	33×23－35	

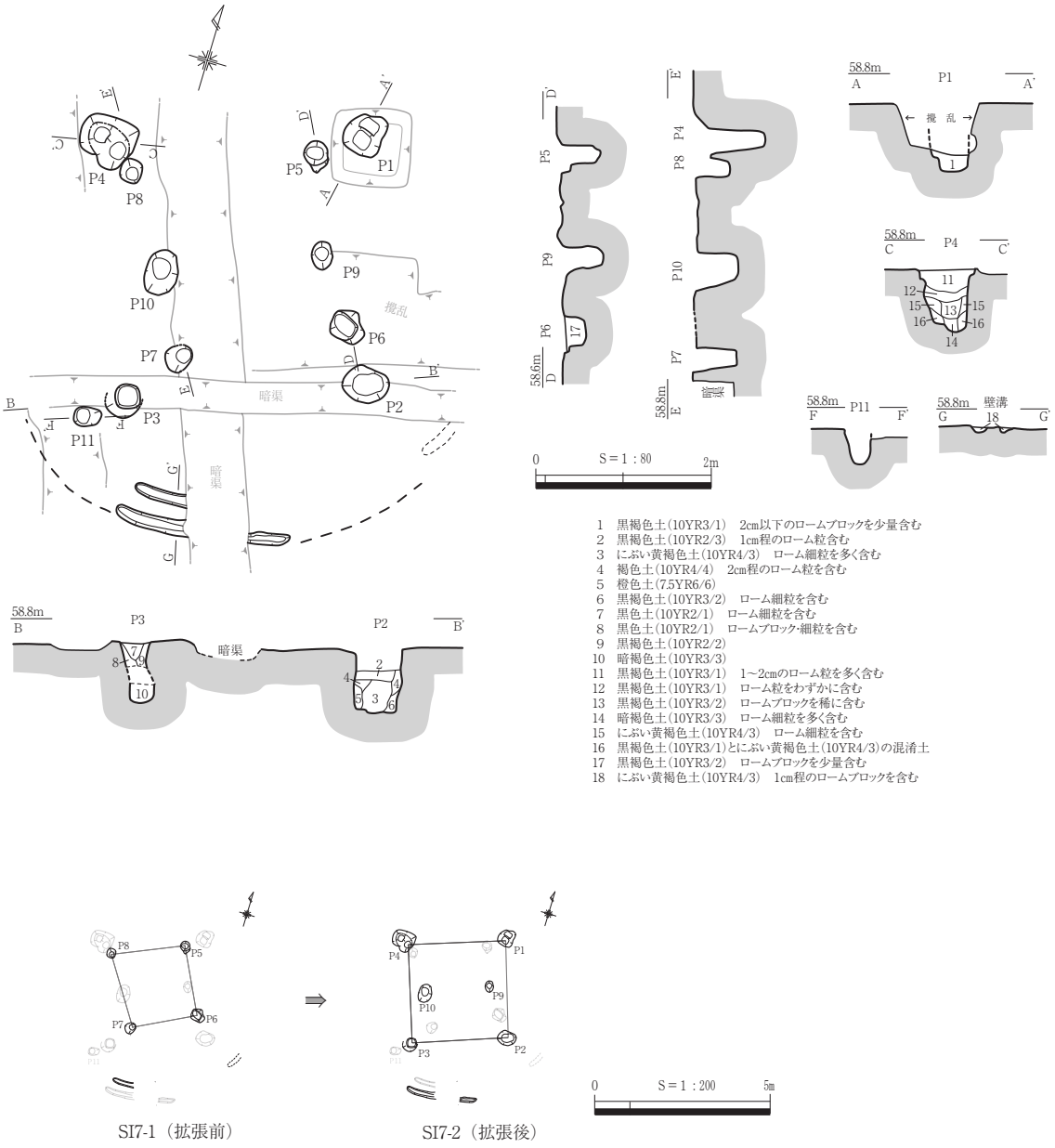
するものが多い。Ｐ４の13層と14層は、柱穴痕の可能性が高く、径15～25cm程度の柱と推定できる。Ｐ２とＰ３は暗渠に切られるため、暗渠内での埋土は、いわゆるハードロームのブロックが混ざっており、しまり・粘性ともやや強い暗褐色土やにぶい黄褐色土などとなっている。

遺物はＰ９の埋土中から土器が出土したが、小片のため図化できなかった。

遺構の時期は、周辺の遺構の状況及び平面形態などから、弥生時代中期後葉ごろと推定できる。

SI８（第48・49図、表８、PL.20・51）

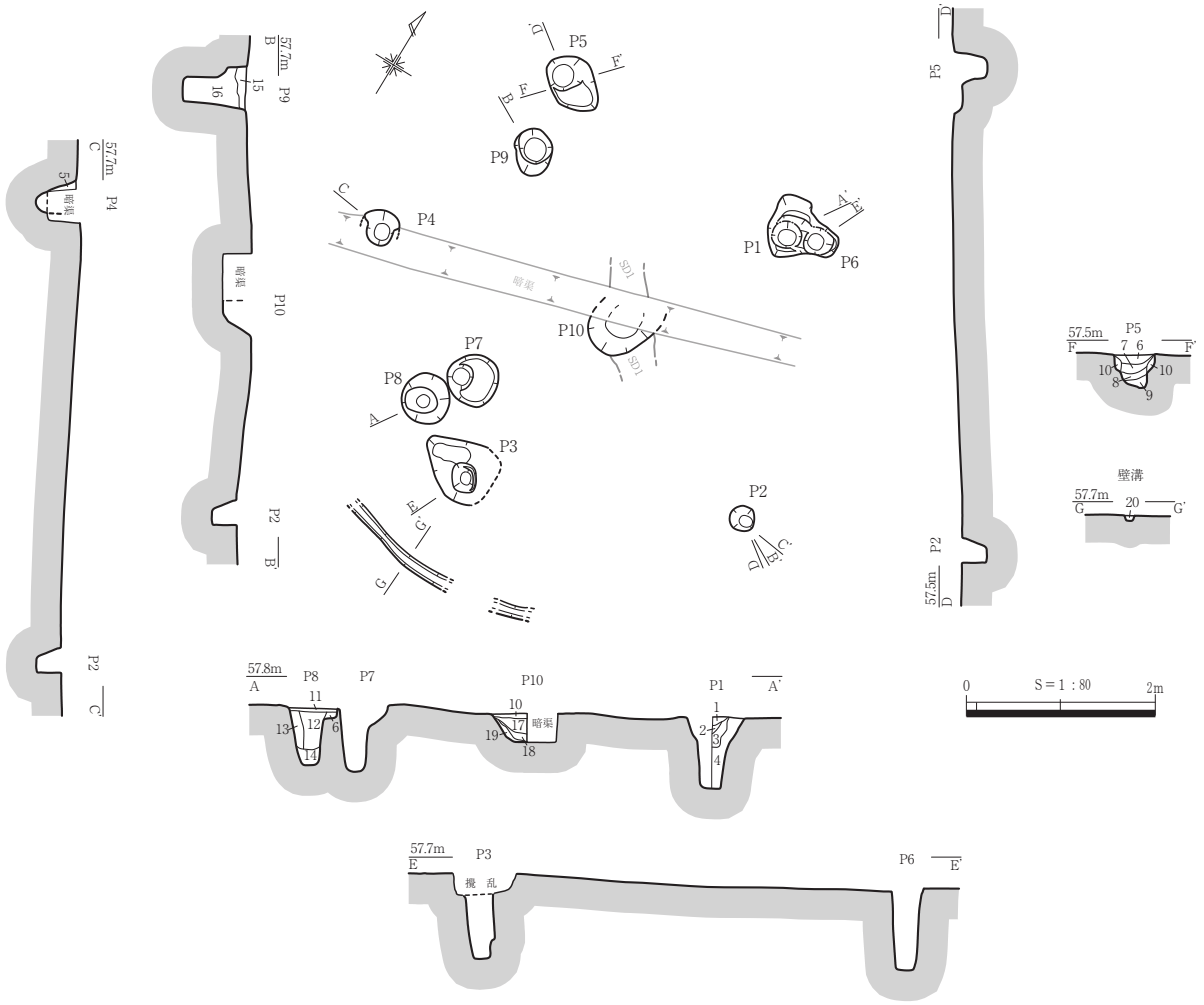
１区中央北寄りのＣ４・Ｃ５グリッドにあり、標高57.5m付近の上部平坦面に位置する竪穴住居跡である。約５m北西側にＳＩ11、約５m南側にＳＢ５があり、住居跡の中央付近までＳＤ１が延びている。梨畑として土地利用された際に削平されており、表土除去後のソフトローム層で検出した。暗



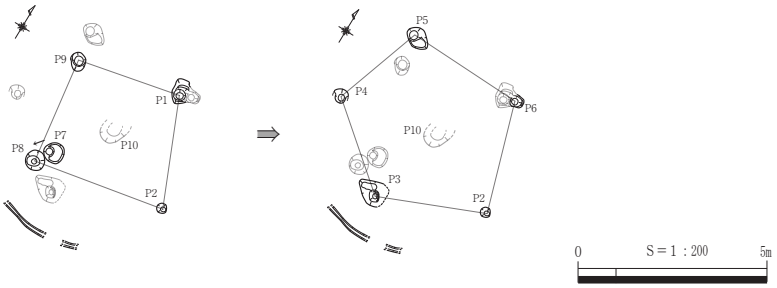
第47図　SI７

渠や施肥溝によって大きく攪乱を受けており、わずかに残る壁溝と柱穴配置から竪穴建物跡と認識できた。

平面は円形を呈すると推定できる。住居跡の南側において、わずかに壁溝を検出した。壁溝から復元した住居跡の径は約6.8m、床面積は36.3㎡で、深さは不明である。壁溝は幅８～15㎝、深さ６㎝



1　黒褐色土(10YR2/2)　ローム細粒をわずかに含む
2　黒褐色土(10YR2/3)　ローム細粒を含む
3　黒褐色土(10YR3/2)　ローム細粒を多く含む
4　暗褐色土(10YR3/3)　ローム細粒を多く含む
5　黒褐色土(10YR3/1)　ローム粒を含む
6　黒褐色土(10YR2/2)
7　黒褐色土(10YR2/2)とにぶい黄橙色土(10YR7/3)の混淆土
8　黒褐色土(10YR2/2)　ローム粒を含む
9　黒褐色土(10YR2/2)　ローム粒を多く含む
10　黒色土(10YR2/1)
11　黒褐色土(10YR3/1)
12　黒褐色土(10YR2/2)　ロームブロック･細粒を多く含む
13　褐色土(10YR4/6)と黒褐色土(10YR2/2)の混淆土
14　黒褐色土(7.5YR2/2)　ローム細粒を含む
15　黒褐色土(10YR3/1)
16　黒色土(10YR2/1)　ロームブロックを多く含む
17　黒色土(10YR2/1)　ローム細粒を含む
18　黒褐色土(10YR2/2)　ローム細粒を少量含む
19　黒褐色土(10YR3/2)　ローム細粒を含む
20　黒褐色土(10YR2/2)と褐色土(10YR4/4)の混淆土



第48図　SI８

である。

主柱穴と考えられるのは、Ｐ１～Ｐ９の９基で、Ｐ３～Ｐ６は建て替えの際のものと考えられ、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ８・Ｐ９の４本柱の建物（ＳＩ８－１）とＰ２～Ｐ６の５本柱の建物（ＳＩ８－２）に復元できる。耕作の際の攪乱のため、本来の柱穴の規模はわからないが、径25～65㎝程度、深さは25～85㎝程度となる。

表８　ＳＩ８ピット一覧表

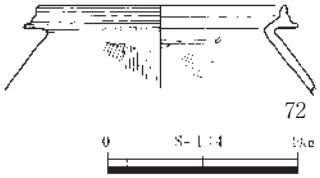
ピット番号	規模（長軸×短軸－深さ）cm	備考
Ｐ１	66×37－75	主柱穴
Ｐ２	29×28－27	主柱穴
Ｐ３	32×27－85	主柱穴
Ｐ４	39×38－45	主柱穴
Ｐ５	65×48－37	主柱穴、柱痕（径27㎝）
Ｐ６	36×33－86	主柱穴
Ｐ７	55×54－67	主柱穴
Ｐ８	55×52－61	主柱穴、柱痕（径20㎝）
Ｐ９	51×42－68	主柱穴
Ｐ10	67×53－30	

主柱穴間距離は、SI８－２で、Ｐ６－Ｐ２間から時計回りの順に、3.0m、3.0m、2.8m、2.5m、3.2mである。埋土は、黒色土または黒褐色土を主体とし、ロームブロックを含んでいる。

主柱穴のほかに、中央付近で、北側が暗渠に切られるが、最大長80㎝、深さ64㎝の土坑状の掘り込みを検出したが、いわゆる中央ピットと考えられる。

遺物には、壁溝埋土中から出土した甕72がある。

遺構の時期は、出土遺物から清水編年Ⅳ－２・３様式、弥生時代中期後葉と考えられる。また、この住居跡がSD１を切ることから、SD１よりも後の時期と考えられる。



第49図　SI8出土遺物

SI９・10（第50～56図、表９、PL.21～23・51～53・82・85・86）

２区東側のＦ11グリッドにあり、標高50.7～51.7mの斜面部に立地する竪穴住居跡である。造成土を除去した後の弥生時代中期の遺物を包含するＶ・Ⅵ層で検出し、SI９がSI10埋土を掘り込むことが確認できた。北西側約２mにはSK34が隣接している。

SI９は、平面は歪な楕円を呈し、長軸6.0m、短軸5.0m以上を測る。深さは、最も遺存状態のよい東壁で最大0.77mである。床面積は、推定21.3㎡である。壁溝は確認できなかった。

主柱穴はＰ１～Ｐ４の４基で、主柱穴間距離は、Ｐ１－Ｐ２間から順に2.8m、2.8m、2.9m、2.6mである。Ｐ２で柱痕が検出されたが、復元される柱径は約16cmである。

住居中央に、中央ピットＰ５がある。平面は楕円形を呈し、断面は二段掘りである。主柱穴に比べて規模が大きいが、やや浅い。埋土は２層に分層でき、下層は焼土粒をわずかに含んでいる。

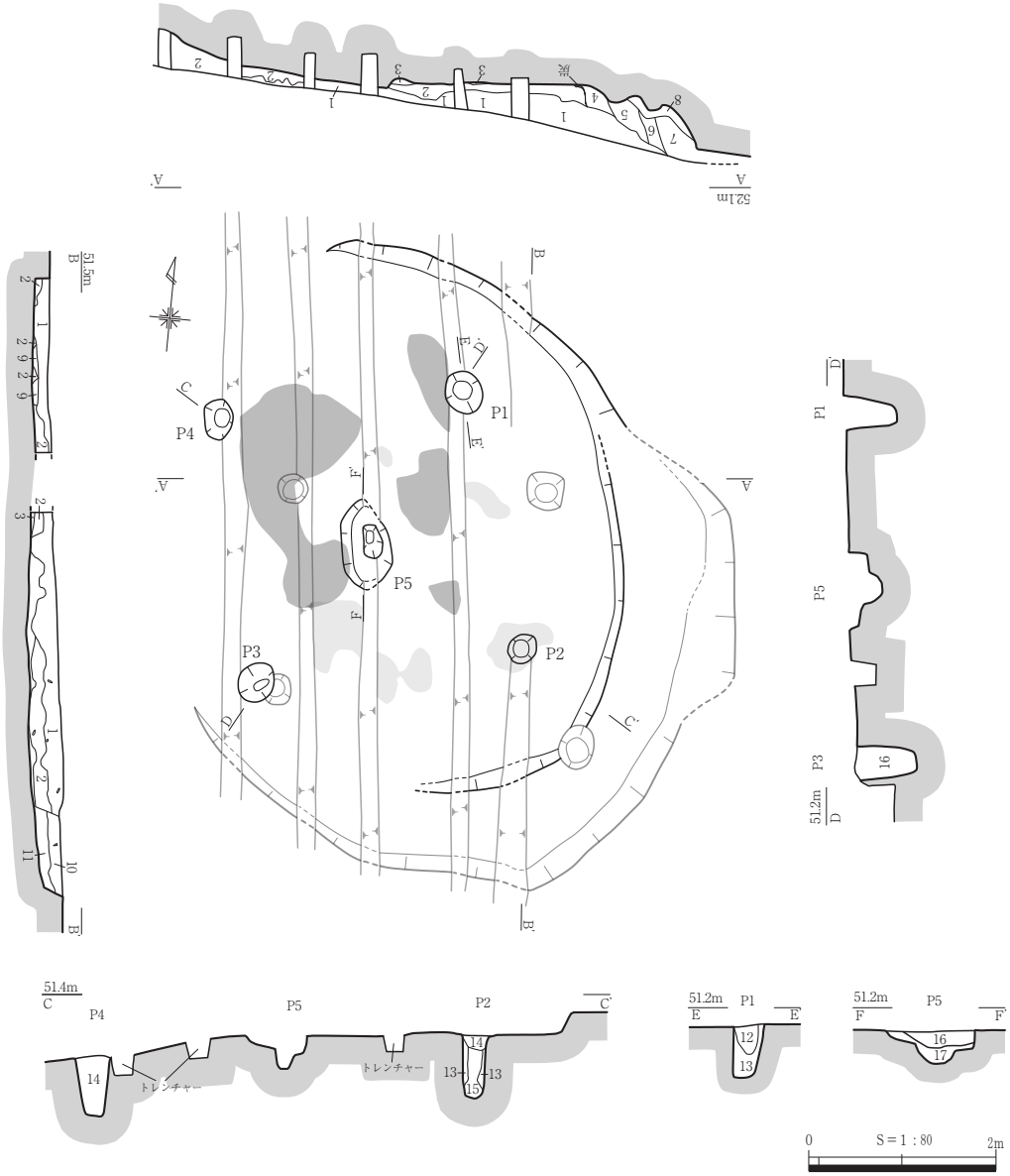
住居中央やや北寄りで床面上からやや浮いた状態で、焼土が盛り上がるように検出された。また、床面全域に亘って多量の炭化材を検出した。特に東壁から北壁寄りで良好な状態で炭化材が出土した。概ね壁際から住居中央部に向かって倒れこむように検出した炭化材は垂木と考えられる。また、東壁際で検出した壁に並行するように出土して炭化材（No.1225）は、形状が板状であり位置関係から壁際に立てた堰板の可能性もあるが、木目が長軸方向であること、垂木が乗り掛かって検出されたことから、板状の母屋桁の可能性がある。

また、樹種同定の結果、垂木と考えられるNo.1215・1228・1262はスダジイ、No.1222はニガキ、No.1235はクスノキ科、No.1266・No.1459はクリ、梁・桁と考えられるNo.1225はケヤキ、No.1246はカヤ、部材不明のNo.1267はケヤキと同定された。

埋土は５層に分層でき、第２・４層は炭化物を含む。

遺物は、床面直上で弥生土器甕85、甕底部93、無斑晶安山岩製石鏃Ｓ30・Ｓ32、黒曜石製石鏃Ｓ37・Ｓ38、緑色凝灰岩製管玉片Ｓ39が、Ｐ５内から甕底部92が出土した。また、埋土中から弥生土器壺73～76・78～80、短頸壺81、甕82～84・86～94・95、高坏96～99、土製紡錘車100～102、細粒花崗岩製砥石Ｓ28、安山岩製有溝石錘片Ｓ29、無斑晶安山岩又はサヌカイト製石鏃S31・Ｓ33～Ｓ36が出土した。埋土中遺物は、斜面上方から流れ込んだような状態で出土した。なお、弥生土器壺78は、SIｇの周辺から出土したものである。

出土遺物のうち73・76～79・86・87・96は清水編年Ⅲ－３様式からⅣ－１様式と古相を示すが、

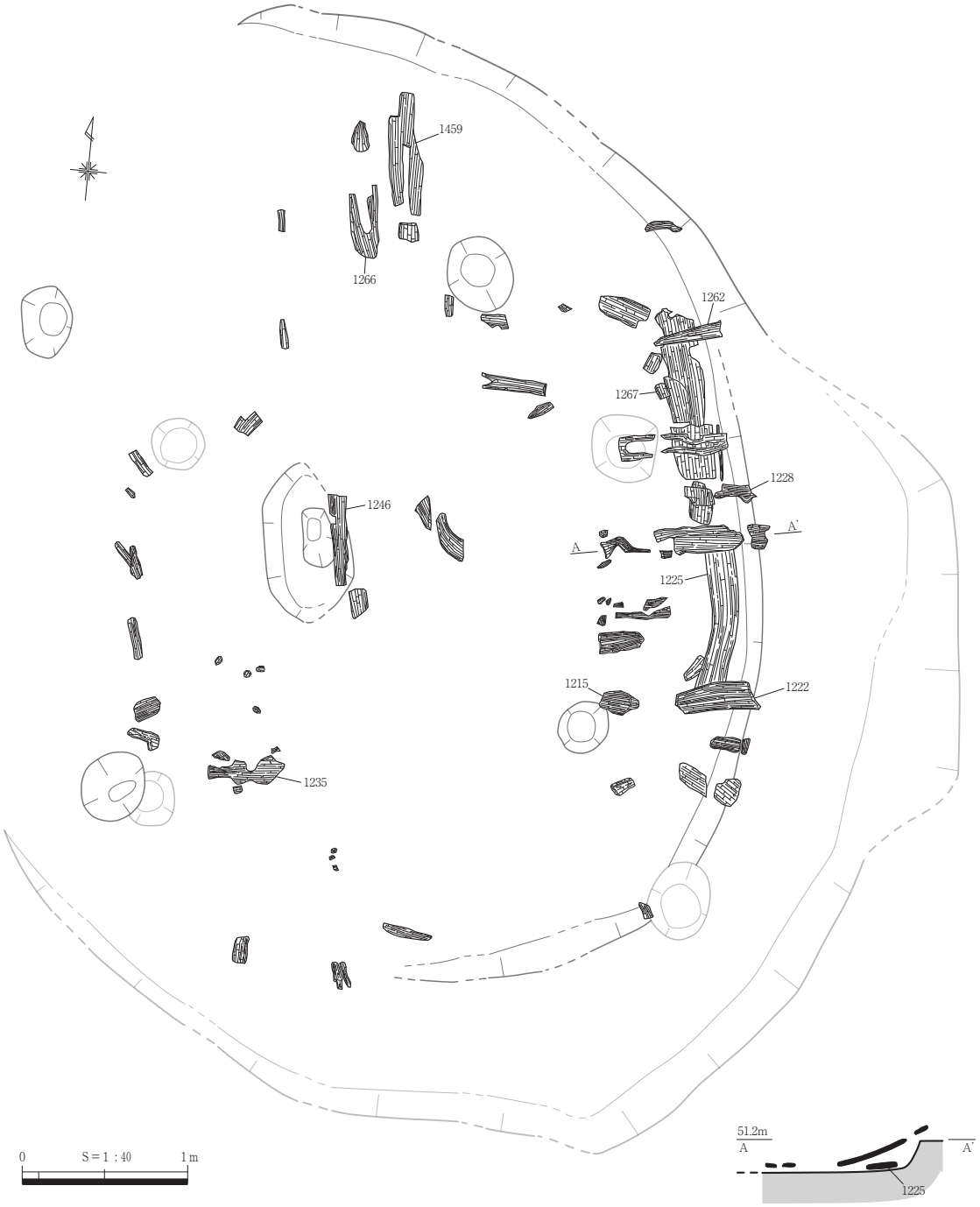


1　黒褐色土(10YR2/3)　細砂。白色粒を多く含む
2　赤黒色土(2.5YR2/1)　微砂。白色粒を少し含む。炭化物を含む
3　暗赤褐色土(2.5YR3/3)　微砂
4　黒褐褐色土(10YR2/2)　微砂。地山ブロック土を多く含む。炭化物を含む
5　黒色土(7.5YR1.7/1)　微砂。白色粒を多く含む。地山ブロック土・炭化物を少し含む
6　黒褐色土(5YR2/1)　細砂。白色粒を多く含む
7　黒色土(10YR2/1)　細砂。白色粒を多く含む
8　暗赤褐色土(2.5YR3/2)　微砂。地山ブロックを多く含む
9　黒褐色土(5YR2/2)　細砂。炭化物を含む
10　黒褐色土(7.5YR2/2)　微砂。白色砂粒を含む
11　黒色土(7.5YR1.7/1)　微砂。白色砂粒を含む
12　黒褐色土(10YR3/2)　黄褐色ロームブロックを含む
13　にぶい黄褐色土(10YR7/3)　黄褐色ロームブロックを含む
14　黒褐色土(10YR3/2)
15　暗褐色土(10YR3/3)　黄褐色ローム粒を含む
16　黒褐色土(10YR3/1)　炭化物・焼土粒をわずかに含む
17　暗褐色土(10YR3/3)　ホーキ粒を含む。焼土粒をわずかに含む

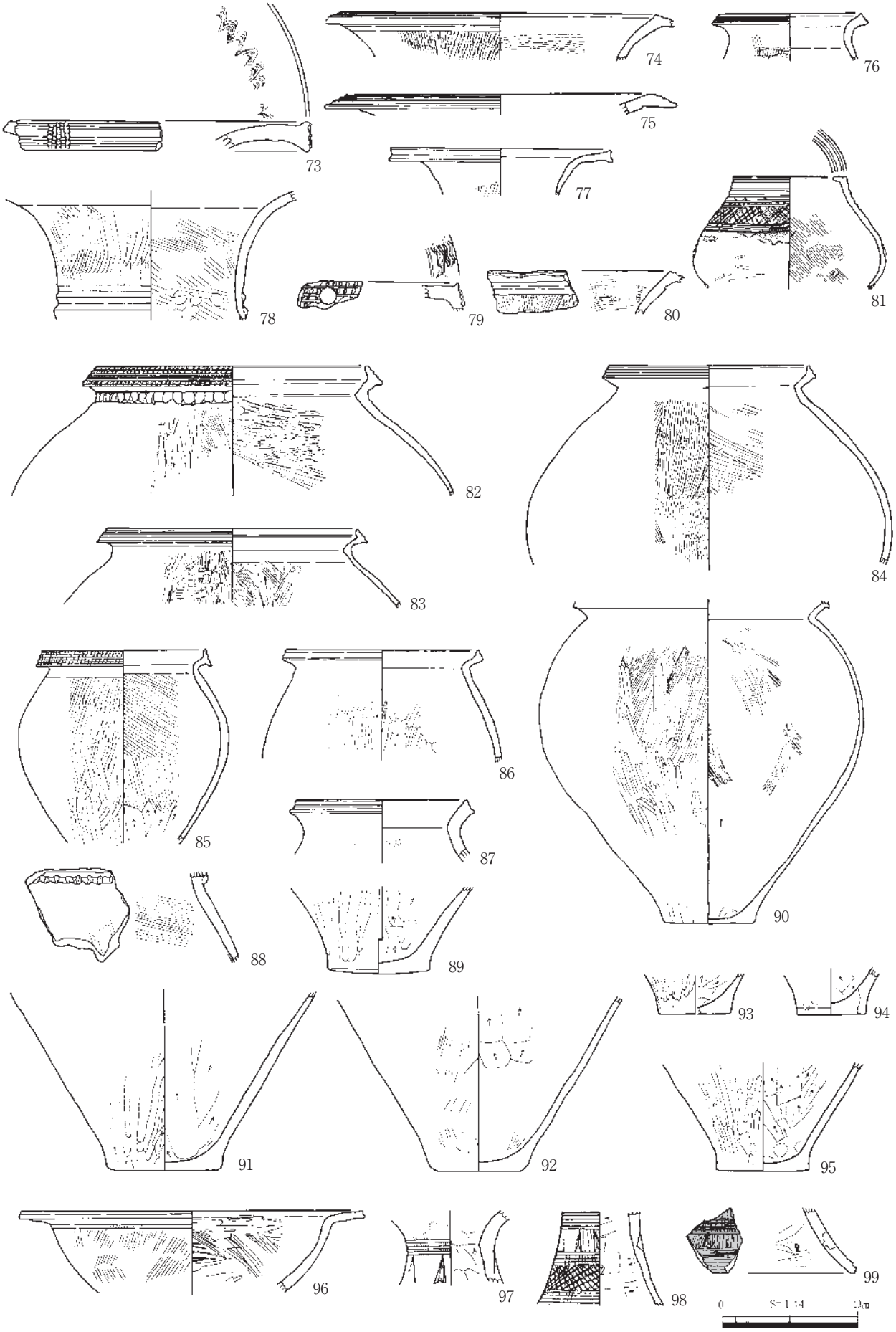
第50図　SIｇ（１）

埋土中出土のものは清水編年Ⅳ－２・３様式ごろと考えられ、これら新相を示す遺物が本遺構の時期に近いものと考えられ、弥生時代中期後葉ごろのものと考える。床面から埋土下層では、炭化材や焼土が多量に検出されたことから焼失住居であると考える。また、床面上では完形に復元できる遺物が見られなかったことから、本住居跡は、故意に燃やされたものと考えられる。また、炭化材の年代測定の結果、補正年代値で2,090±30BP（IAAA－103149）、2,100±20BP（IAAA－103150）の年代値が得られた。この年代値は、土器型式とも符合するものと考える。

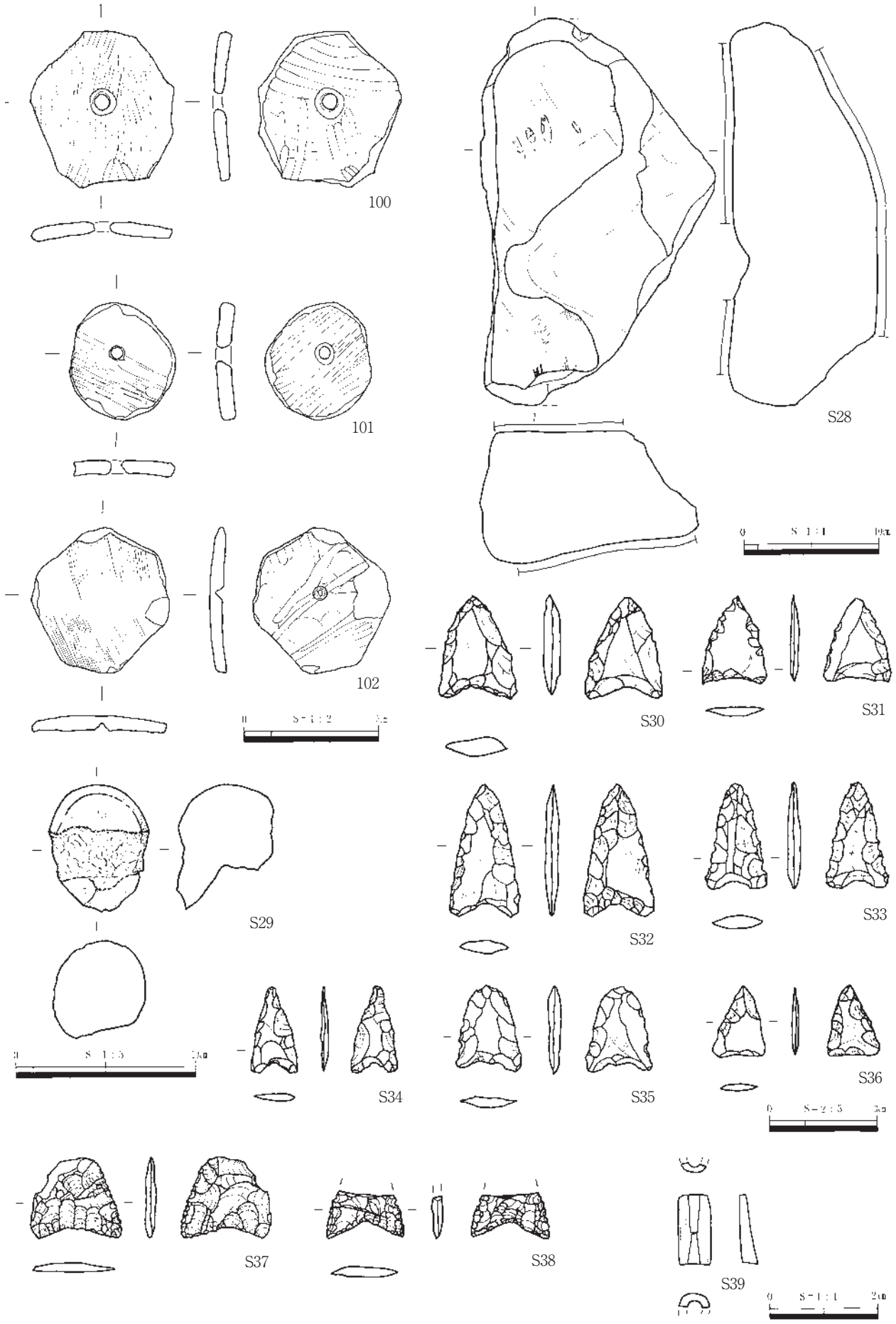
SI10は、SI９に大きく掘り込まれており、確かな形状は不明であるが、平面形は遺存する壁から楕円形を呈すものと考えられ、長軸5.2m以上、短軸5.0m以上、深さは最も遺存状態のよい東壁で最



第51図　SI９（２）



第52図　SI9出土遺物(1)



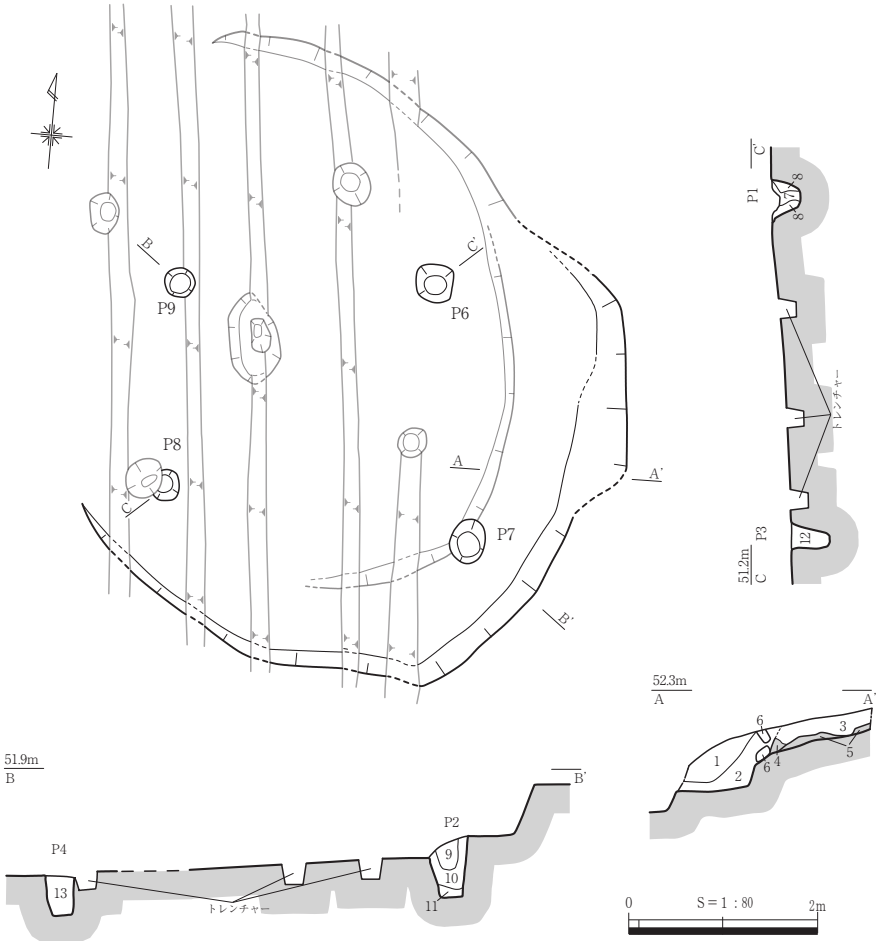
第53 図　SI9出土遺物(2)

大0.57ｍを測る。床面積は5.4㎡以上、復元すると20.9㎡程度と推定できる。壁溝は検出していない。

主柱穴は、SI９の床面上で検出したＰ６～Ｐ９の４基で、主柱穴間距離はＰ６－Ｐ７間から順に2.8ｍ、3.2ｍ、2.1ｍ、2.7ｍである。

埋土は２層に分層できた。黒褐色土から暗褐色土系の埋土で、第１層には焼土粒をわずかに含んでいる。

遺物は、床面直上で無斑晶安山岩製石鏃Ｓ40が、埋土中から壺底部108、甕103～105・107・109、無頸壺106、土製紡錘車110・111が出土した。埋土中出土遺物は、斜面上方から流れ込んだような状態で出土した。



1　黒褐色土(10YR3/2)　焼土粒をわずかに含む
2　暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒をわずかに含む
3　黒褐色土(10YR2/3)
4　暗科色土(10YR3/4)　地山
5　褐色土(10YR4/4)　地山
6　褐灰色土(10YR4/1)　攪乱土
7　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　黄褐色ロームを多量に含む
8　黄褐色土(10YR5/6)　褐色土含む
9　黒褐色土(10YR2/3)　ホーキ粒をわずかに含む
10　暗褐色土(10YR3/4)　黄褐色ロームブロックを含む
11　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　黄褐色ロームブロックを含む
12　黒褐色土(10YR3/2)　黄褐色ローム粒をわずかに含む
13　黒褐色土(10YR2/2)　黄褐色ローム粒をわずかに含む

第54図　SI10

出土遺物には、SI９同様古相を示すものがあるが、105は清水編年Ⅳ－２・３様式ごろと考えられ、これが本遺構の時期を示すものと考えられる。

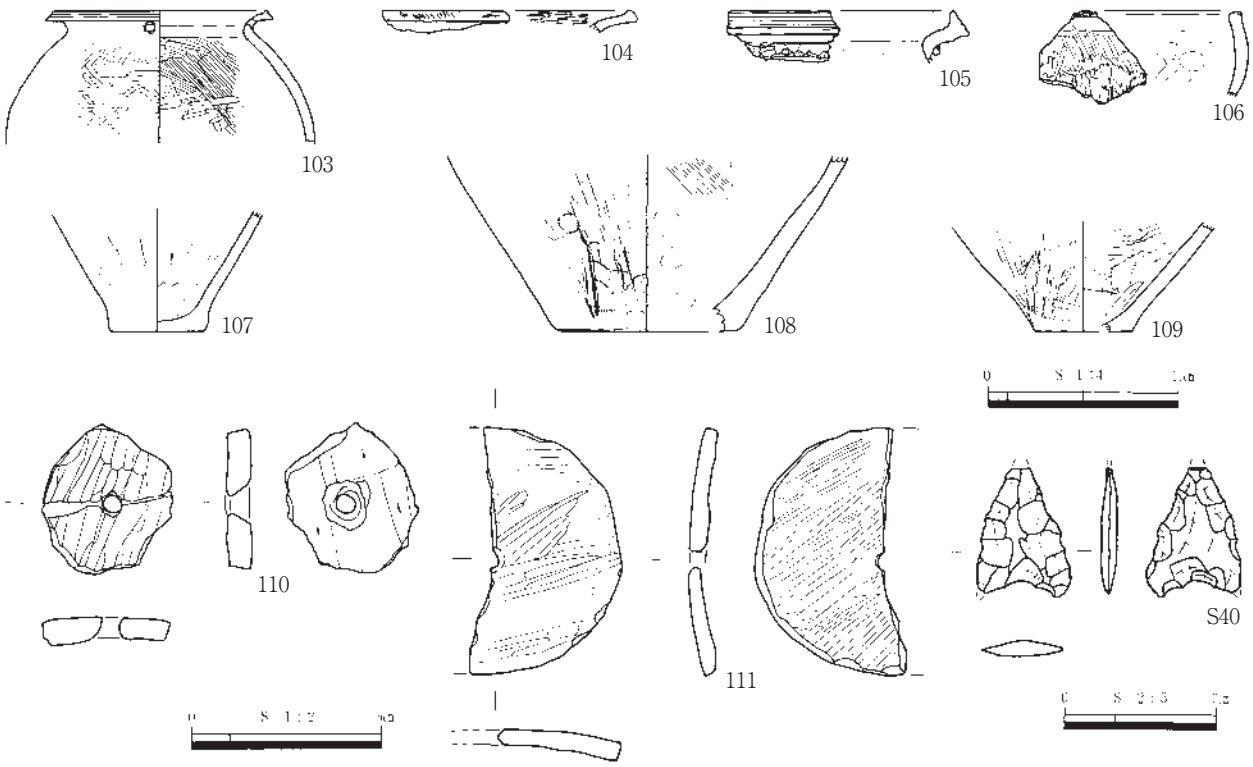
本遺構の時期は、弥生時代中期後葉ごろと考えられ、SI９に先行して造られたものといえる。

表９　ＳＩ９・10ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸－深さ)cm	備考
Ｐ１	45×39－54	SI９主柱穴
Ｐ２	33×28－78	SI９主柱穴
Ｐ３	45×36－67	SI９主柱穴
Ｐ４	44×30－61	SI９主柱穴
Ｐ５	96×51－48	SI９中央ピット
Ｐ６	40×39－31	SI10主柱穴
Ｐ７	46×35－61	SI10主柱穴
Ｐ８	33×28－50	SI10主柱穴
Ｐ９	30×30－58	SI10主柱穴

SI11(第57・58図、表10、PL.23・53)

１区北端のＢ５グリッド北寄りにあり、標高57.0m付近の上部平坦面に位置する。後述するように壁溝埋土中から石鋸が出土しており、未成品や石屑は出土していないが、玉作工房の可能性がある。約５ｍ南東側にＳＩ８がある。住居跡の北半分は、調査区外に当たることから、本調査の対象とはならなかった。梨畑に土地利用された際に削平されており、表土除去後のソフトローム層で検出し



第55図　SI10出土遺物

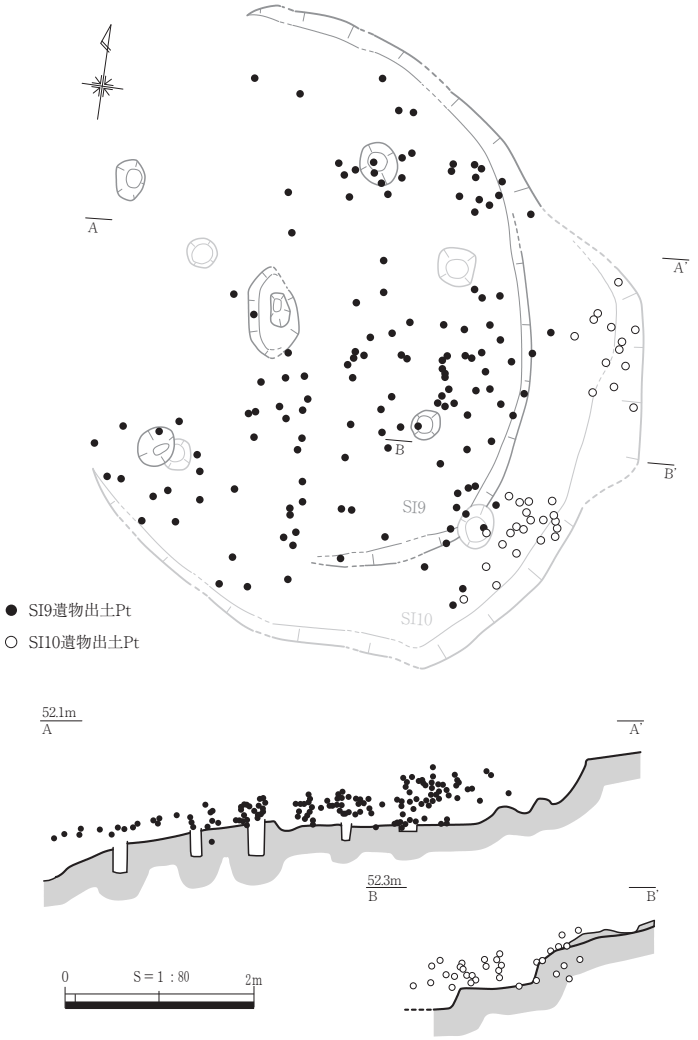
た。暗渠や施肥溝によって大きく攪乱を受けており、わずかに残る壁溝と柱穴から竪穴建物跡と判断できた。

平面は円形と推定できる。壁溝は建物跡の東西と南東部分でわずかに残っており、現状での幅20～30cm程度で、深さ７cmであった。建物跡の規模は、径6.9m、床面積36.3㎡に復元でき、深さは不明である。

主柱穴に該当すると考えられるのはＰ１～Ｐ３の３基で、調査区外のものを含めると、５基の主柱穴が存在すると推定できる。表面が攪乱されているほか、Ｐ３の南側が暗渠で壊されていたため、本来の柱穴の規模はわからないが、現状での規模は、Ｐ１が径40～42cm、深さ58cm、Ｐ３が径48cm、深さ64cmである。Ｐ２は、堀方の上の部分が北側で広くなっており、径は56～72cm、深さは80cmとなる。

主柱穴間距離は、Ｐ１－Ｐ２間が3.0m、Ｐ２－Ｐ３間が2.8mとなる。

主柱穴のほかに、径20～30cm程度、深



第56図　SI９・10遺物出土状況

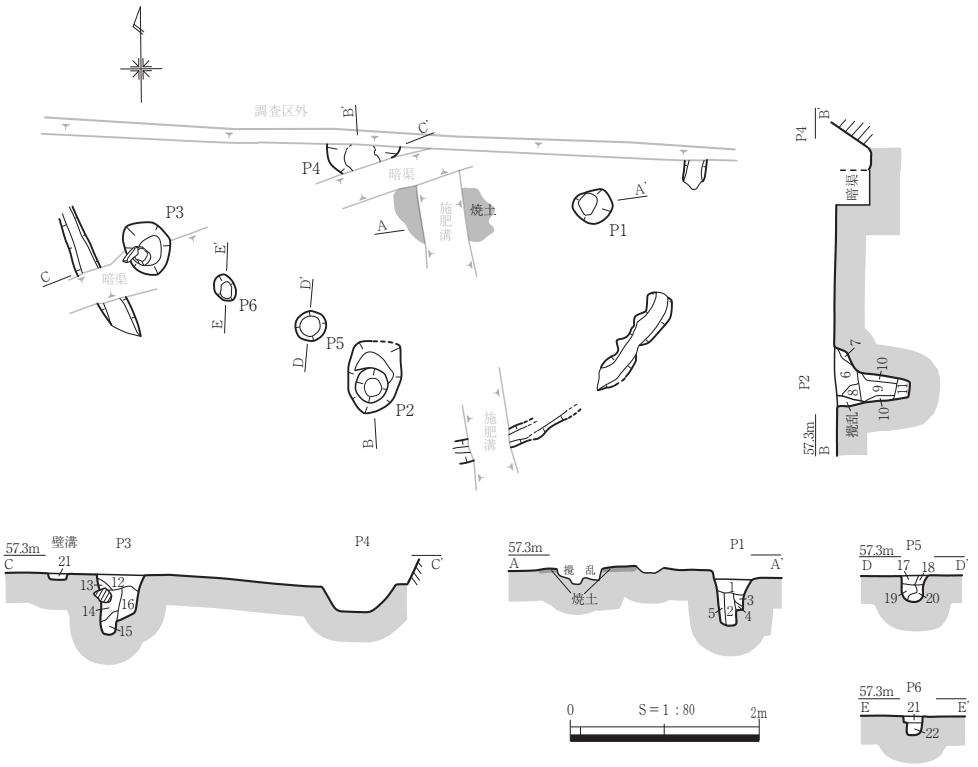
さ20～30cm程度のＰ５とＰ６を検出したが、住居跡に関係するものかどうかは不明である。また、住居跡の中央付近で、最大長78cm、深さ約20cmを測るＰ４を検出した。中央ピットに相当する可能性がある。

主柱穴の埋土は、しまりのやや強い黒色土または黒褐色土を主体とし、Ｐ１の２層、Ｐ２の９層、Ｐ３の14・15層はいずれも柱痕に相当すると考えられる。この柱痕から復元した柱の径は、Ｐ１からＰ３の順に、それぞれ22cm、27cm、32cmとなる。

床面中央よりやや南東側において、6.2×10.5cmの範囲にわたる焼土面を検出したが、施肥溝によって壊されていた。

遺物は、Ｐ１～Ｐ３および壁溝の埋土中から出土した。112は壺または甕の底部片であり、113はＰ２埋土中から出土した壺口縁片である。Ｓ41は結晶片岩製の石鋸である。

出土土器のうち、113の壺は、口唇部の波状文や円形浮文など古式の特徴を残し、凹線文を施すことから、清水編年Ⅲ－３様式に相当すると考えられ、遺構の時期は弥生時代中期中葉の範疇で捉えることができる。

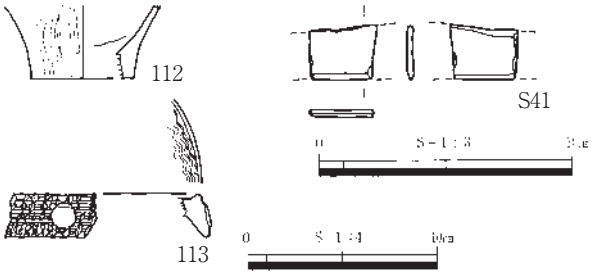


1　黒色土(10YR2/1)　1mm未満のローム粒をやや密に含む。
　2～3mm程度のロームブロックを少量含む
2　黒色土(10YR2/1)　1～2mm程度のローム粒を少量含む
3　黒褐色土(10YR3/1)　1～2mm程度のローム粒をやや密に含む
4　黒褐色土(7.5YR3/1)　1mm未満のローム粒を少量含む
5　黒色土(10YR2/1)　1～10mmのローム粒･ロームブロックを多く含む
6　黒色土(10YR1.7/1)　細砂を少し含む
7　黒褐色土(10YR3/1)　1～2mm程度のローム粒をやや密に含む
8　黒色土(10YR1.7/1)　1～2mm程度のローム粒を多く含む
9　黒色土(10YR1.7/1)　1～10mm程度のローム粒･ロームブロックを少量含む
10　黒褐色土(10YR2/2)　1～2mm程度のローム粒をやや密に含む
11　黒褐色土(10YR3/1)　1～2mm程度のローム粒を少量含む
12　黒色土(10YR1.7/1)　1～10mm程度のローム粒･ロームブロックを多く含む
13　黒色土(10YR2/1)　1～2mm程度のローム粒をやや密に含む
14　黒色土(10YR1.7/1)　1～2mm程度のローム粒をやや密に含む
15　黒褐色土(10YR2/2)　1～2mm程度のローム粒を密に含む
16　黒色土(10YR2/1)　1～10mm程度のローム粒･ロームブロックをやや密に含む
17　黒色土(10YR1.7/1)　1mm未満のローム粒を少量含む
18　黒色土(10YR2/1)　2～3mmのロームブロックをやや密に含む
19　黒色土(10YR2/1)　1mm未満のローム粒を少量含む
20　黒色土(10YR1.7/1)　1～3mm程度のローム粒をやや密に含む
21　黒色土(10YR1.7/1)　1mm未満のローム粒を多く含む
22　黒色土(10YR1.7/1)　1mm未満のローム粒をやや密に含む

第57図　SI11

表10　ＳＩ11ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸－深さ)cm	備考
Ｐ１	42×39－56	柱痕跡有(径22cm)
Ｐ２	78×57－78	柱痕跡有(径27cm)
Ｐ３	61×47－63	柱痕跡有(径32cm)
Ｐ４	77×37－27	
Ｐ５	34×33－29	
Ｐ６	31×23－21	



第58図　SI11出土遺物